

## 李吉甫伝に関する一考察

藤 田 純 子

『旧唐書』と『新唐書』が唐代史研究にとつての基本資料であることは、いうまでもないだろう。しかし、趙瑩、張昭遠等の撰にかかる『旧唐書』の欠を補わんとして歐陽脩、宋祁等が『新唐書』を撰したのであるから、当然のことながら両者のあいだにはかなりの差違があり、その優劣については従来から学者の議論の対象とされてきた。邵晋涵、王鳴盛、趙翼らの考証は今更云う迄もない事であるが、我国では、内藤湖南氏は両唐書に対する従来の諸説をまとめるとともに具体的に両唐書の依拠した資料や書法のちがいなどを明確に指摘し、岡崎文夫氏は『新唐書』をとりあげ、さらに具体的に『旧唐書』との史観の相違点を明らかにしておられて、我々の両唐書に対する理解を深めることに大きく貢献しておられるのである。<sup>①</sup> 両唐書を部分的に見ていけばいろいろ問題があるのであるが、一般的には『旧唐書』は史料としての有効性が高いと評価され、『新唐書』は撰者らが一定の史観のもとに書きなまし、故事の整理、義例に筋を通した史書として評価さ

れている。ところで私は李吉甫の本伝を読み、関連する他の各伝を比較するうちに、いま述べたような両唐書に対する一般的な見方に少々疑問をもつに至った。この小論で取上げる李吉甫本伝の記事は一部分であるからこれを以て両唐書全体に敷衍するつもりはないが、右の一般的な見方を聊か訂正する意味で参考になるのではないかと思われる。地理書『元和郡県図志』の撰者である李吉甫は、唐元和期（八〇六～八一九）の政治家としても名がある。彼は元和期において大きな政治力を振った政治家のひとりであるが、韓愈が『順宗実録』を撰述したさい、監修者として暗に圧力を加えた<sup>②</sup>とされている。また子の徳裕と関連してのちの朋党の争いの端緒を開いたとして論議の対象にされている人物である。ところで、李吉甫の人物像については、われわれはさしあたり両唐書に載せられた本伝によるほかはないのであるが、彼の両唐書本伝の記事は、その資料となったであろう『憲宗実録』が、徳裕によって会昌年間（八四一～八四六）に重修された折に、父吉甫に関する記事を改修したと非難されていることから窺えるように、その記事の信憑性に疑いがもたれている。李吉甫なる人物

はその行事を修飾するために子の徳裕が実録を改修したと非議されるほど、ことほどさように否定的側面の強い人物なのである。賛否はともかくとして李吉甫がいかなる人物であったかについては大いに興味をそそられるのであるが、この小論では元和三年（八〇八）におきた制科事件というべきものの諸記載の検討を通じて両唐書の内包する問題の一端におよぶこと、これらを主な課題としたい。

## 二

最初に憲宗元和三年（八〇八）の制科にかかわる事件というべきものについて、とりあえず『通鑑』の記載にもとづいて、その経過を記しておくこととする。<sup>⑧</sup>

元和三年四月、賢良方正直言極諫科の制挙が行なわれ、これに応じた牛僧孺、皇甫湜、李宗閔らはその対策文の中で、時の政治を失政と指摘し、はばかりとなく批判した。考試官の楊於陵、韋貫之らは彼らを上第で合格させた。さらに翰林学士の裴垕、王涯らも覆視して僧孺らの合格に同意を示し、憲宗もまたこれを嘉して中書に処遇の優与を命じた。ところが李吉甫は牛僧孺、皇甫湜、李宗閔らの直言を憎み、憲宗に泣訴した。王涯はまた皇甫湜が外甥にあたることを先きに報告していないなどのことを指摘されるに至り、憲宗はやむをえず挙人、考試官、覆視官ら制科に関係した人々を処分するにいたった。

以上がその概略であるが、この事件を記す史料には二種あるのである。一は憲宗に泣訴したものを李吉甫と記す史料で、それには李宗閔伝、王涯伝、『通鑑』がある。二は憲宗に泣訴したものを「貴倖ある

いは権倖」と記すもので、これには裴垕伝、『唐会要』がある。

さて元和三年の制科にともなっておきた事柄を背景にして元和朝における李吉甫の施政とその政治的立場にのちの牛李の党争の発端を求めて論じたのは陳寅恪氏であった。<sup>④</sup> 陳氏は『旧唐書』李宗閔伝の記載にもとづいて、牛李の党派争いは憲宗の世に起ったとする。その原因は主として強藩に対する政策の相違にあった。

代宗一代は唐朝の命に従わない藩鎮に対して因循姑息な態度をとりつづけた。徳宗は即位当初強藩抑圧の方針をとったが、彼らの抵抗にあつてのちは代宗時代の政策を踏襲した。憲宗の時代に至つて藩鎮に対する政策は変化するのである。憲宗の即位の翌年にまず西川の劉闢を討平し、ついで鎮海節度使の李錡の乱を平定した。この二藩の討伐に成功して以来、唐朝は積極的に藩鎮を武力をもって抑圧する政策をとりはじめた。藩鎮に対するこのように積極的な政策を執ることを主張し推進したのは主として当時相位にあつた杜黄裳であるが、李吉甫もまたそれに同調し、彼はのち杜黄裳に代つて相位にのぼると、藩鎮を抑圧する政策を推進する中心人物のひとつとなった。<sup>⑤</sup> 陳氏は云う、当時藩鎮に対して主戦論を主張したのはのちの李党であり、反主戦論を主張したのはしたがって李吉甫の政敵となるのちの牛党である。また当時、朝廷内で強い権力を持っていた宦官内にも同様な二派があつた。主戦論を主張する宦官グループはまた憲宗擁立派でもある。この派の代表的人物である吐突承璀は李吉甫とつながりがあつた。<sup>⑥</sup> 元和朝はこの宦官内の主戦派が柄権をにぎって、内外相呼応して強藩に對して武力をもってあたる政策が維持された時代である。したがって

前述したような元和三年の制科にさいして起きた牛僧孺らを排斥した事件は、李吉甫の反対派に対する報復であることは明らかであり、これが牛李の党争の結怨のはじまりである。当時の士大夫間には藩鎮に対する政策のちがいをめぐって党派が醸成されていたとするのが陳氏の見解の概略である。

一方、岑仲勉氏は、さきにあげたように元和三年の制科事件にさいして、憲宗に泣訴したものを「李吉甫」と記す史料、「貴倖あるいは権倖」とする史料の二種あることにもとづいて、憲宗に泣訴したものが李吉甫であるか否かをまず問題にする。そして李吉甫本伝の記事を肯定して、李吉甫泣訴の説をしりぞけ、その党派の存在も否定して陳氏の説に反対した。その反論の根拠のひとつは現存する皇甫湜の对策文である。彼の時政批判の対象は宦官にあって、宰相を責めているものではないというのである。ついで皇甫湜の对策文の内容から推して、牛僧孺、李宗閔両人の对策文（二つとも現存しない）が確かに李吉甫の失政を指摘し批判したものであったならば、のちの牛党にとつてきわめて好都合な資料となるべきはずのものであるのだが、片辞隻字も晩唐の書に見えないのはなぜかという疑問を提出し、その理由として、後年牛僧孺、李宗閔が宰輔の地位にのぼった折、若い頃の宦官に対して行なった批判が現在の自己の地位を危くするものであることを恐れ、人の耳目を転ずるために李吉甫泣訴の説が生ずるに至ったとするのである。牛党が『憲宗実録』を重視する所以は、李徳裕が実録改修を行なったという行為に託して自己の不利をかくすことを計ったところにあるというのが岑氏の主な論点である。ちなみに近年砺波

氏は「中世貴族制の崩壊と辟召制」を研究されたさい、この点に触れておられ、岑氏の説が成りたつ可能性はあるが、やはり無理があるとして李吉甫が泣訴したのであらうとされている。<sup>⑤</sup>

さて、陳、岑両氏の説は以上みたように明らかに相違している。そのもっとも大きな相違点は、陳氏は李宗閔伝にもとづいて論をすすめており、岑氏は李吉甫本伝の記事を肯定し、これによって立論しているところにある。そこから以上のようにまったく対立した見解がでてくるのである。

そこで李吉甫について考察しようとするれば、上記のように相反する解釈を前提に問題を整理しなければならない。さしあたり、一、『旧唐書』の李吉甫本伝の当該記事が事実であるか否か、二、その記事の由来する所はどこにあるのかという二点に問題を限定して再検討を加えていきたい。

### 三

まず李吉甫本伝の記事について真偽を明らかにするために、関係資料を列挙することにする。

李吉甫の唐書本伝はつぎのように記す。

〔元和〕三年秋、裴均僕射、判度支と為り、権倖と交結して宰相を求めんと欲す。

是れより先、制して直言極諫科を策試す。其の中に時政を譏刺して、権倖に忤犯する者有り。此れに因り均が党、皆執政の教指するところと揚言し、以て（李）吉甫を揺動せんことを冀う。諫官

李約、独孤郁、李正辞、蕭儔の密疏陳奏に頼りて、帝の意、乃ち解く。<sup>⑨</sup> (旧伝)

裴均、尚書右僕射・判度支を以て、党を結びて執政を傾けんとす。会たま皇甫湜ら対策し、権彊を指摘す。事を用いる者みな怒り、帝も亦悦ばず。均が党、因りて宣べて言く、殆んど執政の然らしむるなりと。右拾遺の独孤郁、李正辞ら本末を陳述し、帝、乃ち解く。<sup>⑩</sup> (新伝)

新旧の李吉甫本伝の記事はほぼ同じである。当時荆南節度使であった裴均は入朝して宰相の地位を望んでいた。たま／＼制科が実施され、それに応じた挙人が対策文で時政を批判して権倖に忤犯し、あるいは権彊を指摘した。裴均の党はこれに乗じて執政が挙人を教唆して時政批判をさせたものであると揚言し、これを利用して李吉甫の地位を動揺させることを計ったという敘述内容である。

吉甫本伝ときわめて対立する記事載せるのは、李宗閔伝である。

〔李〕宗閔貞元二十一年進士擢第し、元和四年、復た制挙の賢良方正科に登る。初め宗閔、牛僧孺と同年に進士の第に登り、又僧孺と同年に制科に登る。制に應ずるの歳、李吉甫、宰相と為りて国に当る。宗閔、僧孺対策して、時政の失を指切す。言甚だ鯁直、迴避する所無し。考策官の楊於陵、韋貫之、李益等、又其の策を第して中等と為し、又第に中らざる者のために牛・李の策語を注解して、共に唱誹を為す。又、翰林学士王涯の甥の皇甫湜、選に中りしが、考覈の際、先に上言せずと言う。裴均、時に翰林

学士為り。中に居りて覆視して、異同する所無し。吉甫、上前に泣訴す。憲宗、已むを獲ず、王涯、裴均の学士を罷む。<sup>⑪</sup> (略)

(旧伝)

〔宗閔〕賢良方正に挙げらる。牛僧孺と時政を詆切して宰相に触る。李吉甫、之を惡み、洛陽の尉に補す。<sup>⑫</sup> (新伝)

これによれば、元和三年の賢良方正科に応じた李宗閔は牛僧孺とともにその対策文の中に時の失政を指摘して、避けるところがなかった。彼らを合格させた考試官の楊於陵らは合格しなかった挙人のために牛・李の対策文に注釈をほどこし解説して、ともに時政批判を行なった。同じく合格した皇甫湜は王涯の甥であったが、王涯は考覈の前にそのことを上申しなかった。覆視官である裴均は彼らの合格を認めた等の事実をもとに李吉甫は憲宗に泣訴し、その結果として挙人、考試官、覆視官などの関係者が処罰されたという敘述内容である。王涯の伝には左のように記されている。

元和三年、宰相李吉甫の怒る所と為り、学士を罷め、守都官員外郎たり。再た虢州司馬に貶せらる。<sup>⑬</sup> (旧伝)

他にこの件を記すのは兩唐書の裴均伝である。

〔元和〕三年、詔して賢良を挙げ。時に皇甫湜の対策有り。其の言、激切、牛僧孺、李宗閔も亦、時政を苦詆す。考官の楊於陵、韋貫之、三子の策を皆上第に升す。〔裴〕均、中に居りて覆視し、同異する所無し。貴倖、泣訴を為して、罪を上に請う。憲宗、已むを得ず、於陵・貫之の官を出し、均の翰林学士を罷め、戸部侍郎に除す。<sup>⑭</sup> (旧伝)

このように裴垪伝では李宗閔伝等で泣訴したものは李吉甫となったものが「貴倖」になっている。

『唐会要』は李宗閔伝と他の部分は同じであるが、泣訴した者を「權倖」としているのが李宗閔伝と異なるところである。<sup>⑤</sup>『通鑑』は第二節の冒頭に記したように裴垪伝とほぼ同じ記載である。

以上、憲宗に泣訴した者を誰とするかという点について列挙した。そのうち李宗閔伝、王涯伝、『通鑑』は、李吉甫泣訴説をとり、「貴倖、權倖」が泣訴したとする説をとるのは裴垪伝、『唐会要』であるということが分った。ところで、李吉甫と裴垪は元和朝の官人として『憲宗実録』に載り、李宗閔、王涯とともに『文宗実録』に載るべき人々であるから、この点に関する記事の相違は『旧唐書』の依拠した実録その他の資料の相違がそのまま列伝に反映されているとの推測は一応なりたつのである。

つぎに問題にしなければならないのは記事の内容である。李吉甫の本伝は、挙人の対策文に時政批判がなされているけれども、それは「執政が挙人を教唆して時政批判をさせた」と裴垪の党が宣伝し、実際には裴垪の党による李吉甫攻撃が目的であった。そこで諫官の独孤郁、李正辞、蕭俛等が事態の本末を正し、白黒を弁別する陳奏を行なつて憲宗の怒りを解いたとなつているが、これは李吉甫本伝だけのものであり、李宗閔伝をはじめとして他の史料とはなだしくいちがった内容になっていることである。換言すれば、李吉甫本伝はいわば李吉甫を被害者の立場においた敘述になっているが、他の史料ではむしろ李吉甫を加害者として記しているのである。同じ唐書の中でこの

ように正反對の記述がなされているのは何とも不自然であり、どちらか一方に作為が働いていることを明瞭にものごたるものである。李吉甫本伝で敘述されたことがもし事実であつたとするなら、同時代人の裴垪の伝にそれを窺わせる記載がなければならぬはずであるが、そのような手がかりを与える敘述は一切なく裴垪伝の内容はほとんど李宗閔伝などの内容と一致している。このような裴垪伝の敘述と考えるとあわせても李吉甫本伝の記事に対して疑義を深める結果となるのである。しかしながら李吉甫本伝の記事に疑いをもち、それと対立する史料を並記するだけでは李吉甫本伝の記事に対する反証とするには不十分である。

そこで元和三年の制科に言及する史料を他にあたってみると、白居易の「制科の人を論ずるの状」なる疏文、李吉甫の諡を駁した張仲方の文がある。

まず白居易の疏文をみてみよう。

臣伏して内外の官を見るに、近日の除改、人心甚だ驚き、遠近の情、憂懼無くんばあらず。道路に喧喧として、異口同音なり。皆云う、制挙の人牛僧孺等三人、時事を直言するを以て、恩獎もて科に登る。落第せられたる人、怨謗して誣を加え、中外を惑乱す。謂て誑妄を為すと。斥けて之を逐う。故に並びに出されて内外の官と為る。楊於陵、策考し、敢えて直言の者を収むるを以ての故に、出されて広府の節度と為る。韋貫之、同じく坐する所なれば、故に出されて果州刺史と為る。裴垪、覆策するに、又直言の者を退けざるを以ての故に、内職を免ぜられて、戸部侍郎に除

せらる。王涯、同じく坐する所なれば、出されて虢州司馬と爲る。盧坦、数しば事を挙ぐるを以て、人の惡む所と爲り、其の彈奏、小さか誤るに因り、得て以て名と爲すの故に、黜されて左庶子<sup>右</sup>と爲れり。王播、之に同じくすれば、亦た知雜事を停む。臣伏して以うに、裴垪、王涯、盧坦、韋貫之等、公忠正直なること、内外咸な知れり。宜しく授るに要權を以てして、之を近地に致すべきなり。故に比來、衆情、私かに相謂て曰く、此の数人は、皆人の望なり。若し数人進るときには則ち必ず君子の道長ぜん。若し数人退くときには則ち必ず小人の道行われん。時事の否感を卜せんと欲せば、数人の進退に在るなり。……今忽ちに一旦悉く之を疎棄して、或は散班に降し、或は遠郡に斥く。設令過有るとも、猶お優容すべし。況んや且つ瑕無きおや。豈に宜しく黜退すべけんや。所以に前月以來、上は朝廷より、下は懼路に至るまで、衆心洵々として、驚懼して安からず。……凡そ此の除改、伝る者紛然として皆云う、裴垪等、委曲に時に順うことあたわず。或は正直を以て物に忤いて、人の媒孽する所と爲る、本と聖意の之を罪するに非ず、審ならず、陛下之を聞くことを得んや否やと。……

この疏文は元和三年五月、当時荆南節度使の裴均は入朝して右僕射を授けられたが、朝廷における席次を無視した振舞を御史中丞の盧坦に彈劾された。しかしそれによつて盧坦はかえつて太子右庶子に格下げされた。白居易はこの事態をとりあげてその不当な処置に抗議するために書いたのである。彼は職責に忠実なためにかえつて罪を得た盧坦の一件を弁護すると同時に、冒頭に類似のケースとして、この直前

の四月の制科にもなつてひきおこされたくだんの事件に言及する。この疏文に記される牛僧孺らが排斥された事件の経過の中には、落第した人々によつて事態が故意に拡大され紛糾した形迹を認めることができるが、しかし李吉甫本伝に記されているような裴均一党による李吉甫攻撃ではないことをこの疏文は有力に示している。

つぎに張仲方の駁文をみてみよう。李吉甫は死後、最初に敬憲と諡されたが、度支郎中の張仲方は敬憲という諡は不適當であると論じた。その駁文の中で張仲方は李吉甫の政治上の功績を半ば否定するのである。彼が否定するもつとも大きな理由には李吉甫が藩鎮に対して武力を用いる政策を推進した点にある。したがつて政策を異にする相手に対して書かれた駁文であるから彼の李吉甫に対する評価をすべて信ずる必要もないが、

〔李吉甫は〕受授に守無し。而るに曰く、才を慎んで以て補うと。諫諍の士を外に斥くるは、豈に之れ蔽聡に近からずや。

という一文は注目してよいであろう。<sup>17</sup>これは明らかに牛僧孺らを排斥した一件を指弾したものであると考えてよい。以上によつて李吉甫本伝にある当該記事、すなわち被害者としての敘述は事実を曲げ、作爲されたものであると認めてよい。

司馬光は李吉甫本伝の当該箇所について、

裴均等、讒を為さんと欲すと雖も、執政自ら拳子を教指して、時政の失を詆らしむと云うが若きは、豈に人情に近からんや、と云い、

子の徳裕秉政し、先人の惡を掩わんとして実録を改定す。故に此

の説有るのみ。

と『考異』の中に記して李吉甫本伝の記事を採用しない。<sup>⑮</sup>この彼の判断は正しいのであるが、しかし彼の判断には確実な根拠があげられているわけではなく、「豈に人情に近からんや」と、主観に訴えるだけのもので、李吉甫本伝の当該記事が李德裕の実録改修によってこの説があるというのみである。『考異』の別な個所では『憲宗実録』の原本（すなわち路随監修本）を引いているところから、彼がそれを見ているのは確かである。ただ彼は李吉甫本伝の記事を採用しない理由に路随本『憲宗実録』によったことを明示せず、また会昌重修本（李德裕によって改修された『憲宗実録』）にもとづいて李吉甫本伝の記事をしりぞけていると明記していないので、そこに曖昧さがつきまとう。岑仲勉氏はこの点で司馬光に反駁を加えているが、私にはこの反駁もまた主観的に感じられ、その論拠は弱い。<sup>⑯</sup>

李吉甫が元和三年の制科にともなうて直言の士および彼らを合格させた考試官、覆試官らを排斥した行為を諸種の史料によって確認できたので、李吉甫本伝の記載は事実を枉げたものであると認められる。したがって岑氏の説はその根拠を失なっているといつてよい。また陳氏は李宗閔伝にもとづいて立論しているものの、李吉甫本伝の記事に関する検討を欠いている部分がある。同じ論考の他のところで蕭俛が李吉甫を擁護したといっているところがあるが、これは李吉甫本伝の記事を自身の立論の便宜にあわせて用いている例であつて、記事の真偽を確認していない不用意さであり、この点もまた訂正されなければならないであらう。<sup>⑰</sup>

#### 四

前節においては元和三年の制科に関する李吉甫本伝の記事に検討を加え、当該記事は曲筆されたものであると確認することができた。ついでこの節では李吉甫伝の底本になつたのは何か、また同伝の曲筆が何に由来するのかという点について考察を進めてみたい。

『旧唐書』が底本としたのは邵晋涵も指摘しているように路随らの監修、沈伝師らによつて修撰された『憲宗実録』（以下路随本と称す）であつた。<sup>⑱</sup>このことは旧書憲宗紀の末に撰者のひとりであつた蔣係の論贊が引用されていることによつて証されるのである。したがつて李吉甫伝も路随本を底本にして書かれたものであると認めれば、同伝の曲筆された個所の記事も当然路随本から来ていると考えてよいわけであるが、後述するように『憲宗実録』は最初に路随本が作られたが、会昌年間に李德裕によつて重修されて会昌重修本が出来、さらに大中年間に刊正を加えられているために即座に断定を下すわけにはいかない事情がある。とりわけ李吉甫本伝の曲筆された記事は会昌重修本から来ているとする説が有力である。そこで『憲宗実録』修撰の経緯を記し、それにてらして底本の問題にふれてみたいと思う。

『憲宗実録』四十巻は、長慶二年（八二二）に修撰の命が下り、路随、韋处厚の監修、蔣係、沈伝師、陳夷行、李漢、宇文籍らの撰になるもので、文宗の太和四年（八三〇）に完成、献上された。<sup>⑲</sup>完成までに七年余の歳月を要したのは、路随の実録を上る表に「中外多故に属すが故に筆削に未だ遑あらず。或は職秩遽かに移りて、刊綴就く莫

し。』(『冊府元龜』卷五五六)と記すように路随、沈伝師などが一時史官の職を離れて地方官として外任につくなどという事情があったためである。そのような情況の中で沈伝師は湖南觀察使として赴任するさい、とくに草稿を持ち出して任所で撰述することを許されたこともあった。<sup>23</sup> ついで武宗の会昌元年(八四一)に至り重修が命ぜられた。

会昌元年四月敕すらく、憲宗実録の旧本未だ備わらず。宜しく史官をして重ねて修して進内せしむべし。その旧本は注破するを得ず。新撰の成るを候ちて同に進めよと。時に李徳裕、先きに憲宗廟を遷さざらんことを請う。議者のために之を沮まれ、復た或は其の父の不善の事を書くを恐る。故に復た実録を改撰せんことを請う。朝野之を非とす。<sup>24</sup> (旧紀)

この敕文によれば路随の旧本が不備であるから重修すること、旧本に注したり、削除したりすることを禁じ、並進することを命じたものであった。だが実際には重修の命は李徳裕の意志より出ていること、この企てより以前に奏請した「憲宗章武皇帝を尊び、不遷の廟と為さんことを請う状」(『李衛公会昌一品集』卷十)が反対にあったためと、路随本に父吉甫の不善の行状が書かれていることを恐れて実録改修をはかったとみなされて、朝野に非難がおこったことを同時に記す。また旧書武宗紀の同年十二月には中書門下によって「実録の体例」を修することが奏請され、その奏請の内容を引用したあとにつづけて、「李徳裕、憲宗実録所載の吉甫不善の迹を改修せんことを奏す。鄭亜希旨して之を削る。徳裕更めて此の条奏ありて以て其の迹を掩わんとす。摺紳謗議す。武宗頗る之を知れり」と記す。この中書門下によって奏

請された「実録の体例」とは李徳裕の手になる「修史の体例」(『李衛公会昌一品集』卷十一)である。こうして会昌重修本は李紳の監修、鄭亜らが修撰し、会昌三年(八四三)に完成され献上された。

ついで宣宗の時代になると再び実録の訂正が行なわれた。

大中二年(八四八)十一月敕すらく、路随等修する所の憲宗実録の旧本は卻た仰せて施行せよ。其の会昌新修の者は、並な仰せて進納し、鈔録を得るもの有るが如くんば、敕到らば並な史館に納めて輒ち留むるを得ざれ。州府に委ねて厳しく搜捕を加えよ。<sup>25</sup> (旧紀)

旧書宣宗紀に従えば、また路随本を施行させ、会昌重修本の進納を求め、鈔録本の所有者は提出を求められ、加えて厳しい搜捕がはかられている。また『新唐書』周墀伝には、「他事に竄寄して以て父の功を広むる」ために改修された会昌重修本は「削去」されたと記されている。この敕文に記されているとおり会昌重修本は、厳しく回収されて刊正が加えられたのである。この大中時の刊正の撰者には崔龜従らがあたった。

以上が『憲宗実録』修撰の経緯である。これから考えられることは公正という点でもっとも疑わしいのは会昌重修本ということになる。そこで会昌重修本について少しふれてみたいと思う。

さきにあげた旧書武宗紀の記載によれば、会昌時の重修は「憲宗廟不遷」の奏請が反対されたことに端を発して、まったく李徳裕の私意から出た改修を目的として作られたものであるということになる。そこに云われている「憲宗廟不遷状」の内容は、憲宗を唐室中興の君と



してその廟の不遷を請うものであった。憲宗を中興の君とみなす所以は、強藩を制圧して唐室の權威を振興させた主体者として顕彰しようとするところにある。それが一体何故に反対されたのか。その理由をいまここで詳しく考察する用意はないのであるが、ほぼ考えられることは、単に憲宗を顕彰することだけに目的があるのであれば、これが実録重修と直接に結びつけられることにはならないであろう。李徳裕にとつて憲宗を顕彰することは同時に元和期の政治を肯定しようとする意志があつたとみてよい。それは要するに元和期の政治を動かした功臣、すなわちその中の一人である李吉甫をも間接的に顕彰することを意味していよう。この意図を察した人々は、「憲宗廟不遷の状」の奏請に反対し、さらにそのあとにつづく実録改修の企てとを結びつけて、それが吉甫の行事を修飾せんがための企図であるとその行為を非難したのであると解釈することができる。だが一方で李徳裕の行為にはまったく吉甫の行事を修飾しようという私意だけから出ているとは云い切れないものが当時の政局にはあつたと考えられる。それは、強藩に対する政策の相違が、当時の政治を動かしていた李党と牛党との間にあつたからである。李党⇨李徳裕は強藩に対して積極的にこれを制圧しようとする政策を主張していたから彼は当然元和期の政策を継承するものであつた。それはすなわち父吉甫の立場を継承するものであり、李徳裕の政策に反対の立場に立つ人々は、当然これを否定しようとするであろう。「憲宗廟不遷の状」が反対されたのは当時の政治上の争いが反映しており、それがまた李徳裕の父吉甫に対する評価にも影響を与えていたと思われる。実際に路随本の撰者の一人である

李漢は、李吉甫の事を仮借せずに書いたために徳裕に憎まれたとあるが、(新書李漢伝)、李漢は当時李宗閔の党に属して徳裕と反対の立場にあつた人物であるから、これは党派の争いが実録の記載にちこまれている例と考えてよい。憲宗の元和期を中興の世とみなすか否かはまた別の問題であるが、これは政策のちがいによる政治上の党派争いが直接的に実録重修に強く影響を与えている例ではないだろうか。その点を考慮に入れると李徳裕の実録改修の目的の一つには憲宗朝ないしは憲宗の治政をどう評価するかという問題が深くかかわりあっていると考えてよいであろう。それは同時に自己の政策の妥当性の正否を左右する問題であつたからである。一方大中時の刊正が公正であつたか否かが問題となる。大中時の刊正がまったく牛党に属する人々の手になつたという事実は決して無視できない点である。さらに大中五年には崔龜從、蔣偕らによつて『続唐歴』が修撰された。これは柳芳の『唐歴』に続くもので、徳宗より憲宗までの編年史である。この書もまた『旧唐書』の底本となつている。撰者のひとり蔣偕は李絳の『李相国論事集』の編者であるが、この書の中に描かれている李吉甫像にはかなり脚色されたふしが見えて公正な描写とはいえないものがある。宣宗自ら武宗および李徳裕に対して含むところがあつたからこの時代に作成された史書の中で李吉甫父子に対して歪曲を加えられる可能性は十分にある。とはいえ目下のところさきに述べたように最も疑わしいのは会昌重修本であることは確かである。

李吉甫本伝の記事に疑いをもつ人々は専らこれを取りあげてその非難の根拠としている。まず司馬光がそうであり、『新唐書糾謬』を

書いた呉縝がそうであり、趙翼も呉縝の説をうけて同じ個所を指摘している。<sup>②⑥</sup> 趙翼は「新書、旧書より増す処」(『二十二史劄記』卷一七)と題して各伝にわたって詳細にその例をあげているが、李吉甫の伝のところでも新伝が旧伝の記事より増した個所を二三例あげ、その理由をつぎのように云う。

按ずるに武宗の時、吉甫の子の徳裕、憲宗実録を重修して、其の父の美を虚張す。宣宗の時、特に命じて刊正せしむ。今、此等の事、旧書皆な無くして、新書之を増す。豈に旧書は大中刊正の本に抛りて、新書は尚、会昌重修の本に抛るらん。<sup>②⑦</sup>

趙翼は本稿で問題にしている曲筆された記事を直接とりあげているのではないが、全体的にみて、ここで、『旧唐書』は宣宗大中年間の刊正本に依拠し、『新唐書』は会昌重修本に依るものであらうと推測している。

これは、司馬光が元和三年の制科に関する『旧唐書』李吉甫伝の記事は会昌重修本によって生じた説だと述べているのと、趙翼の推測とを比べてみると両者の見方にくいちがいのあることがわかるが、かりにこの二説をあわせると『旧唐書』は会昌重修本も大中刊正本もいづれも見えていたという推測も成りたつのである。

このことから考えられるのはいづれも確証にもとづいた見解ではなく、李徳裕に対する批判的立場が優先して李吉甫本伝の記事に関して疑わしい個所があれば、会昌重修本に由来するものではないかという推測を働かせているということである。<sup>②⑧</sup>

そこで仮りに『憲宗実録』の二本が五代から宋にかけて流布してい

たととして、それを目録類の上からたどってみると、『旧唐書』の経籍志には中宗以降の実録類は一本も収録されていないのはつきりしたことはいえない。しかし『新唐書』の芸文志には、『憲宗実録』は路随の旧本のみが収録されているのである。ただし、『新唐書』の芸文志は、実際に見た本だけを確認して収録しているとはかぎらないといわれている。<sup>②⑨</sup> そこで『崇文総目』によって確かめると、ここでも路随等の『憲宗実録』のみが収録されているのである。<sup>③①</sup> したがって五代から宋にかけて確かに流布していたのは路随の旧本であることは確認でき、『新唐書』もまた、この本をみていたと考えてよい。目録類の上からみるかぎりにおいて会昌重修本の存在は確かめられないのであるが、『憲宗実録』の二本がともに流布していたことも前提にして趙翼は『新唐書』は会昌重修本を底本としたのではないかといひ、呉縝もまた非難的を李徳裕が事実を枉げたという一点にあてているのは別な意図があるのではないかという疑いをもたざるをえない。李吉甫本伝の記事に作為が施され、その記事の由来がどこにあるのかという議論になるとまったく党派の見方に左右されていて確証にもとづいた議論は少ないようで、一方的に『憲宗実録』の会昌重修本より出ているという議論にそれは表われているといえよう。李吉甫の行為が非であると判断されるのは肯定できるが、その事柄と記事の作為がどこでなされたかということは別問題なのではないだろうか。さきの実録修撰の経緯を記した個所でも触れたように当時李徳裕のおかれていた政治的立場が強く反映しており、大体は李党の首魁と目される李徳裕に結びつけられて、李党に対する反感が増幅され、実録改修が非議され

てきたのであるというのが真実に近いと考えてよい。

以上から会昌重修本にだけに曲筆された記事の由来を求めるのには問題がある。

李吉甫伝の当該記事に関しては『旧唐書』も『新唐書』もほぼ同じであり、『新唐書』の方はいく分簡約になっている程度で訂正をほとんどしたあとはない。また李吉甫伝の記事と対立する他の伝の記事も『新唐書』の方はおおむね簡約化されているけれども、その要旨においては変わりはないのである。そうとすれば、まったくの推測であるが可能性として李吉甫本伝の記事についてだけ会昌重修本をみたのではないかという見方より、李吉甫本伝の当該記事も他の対立する各伝の記事もともに路随の旧本より出ていると考えることができる。李吉甫本伝の記事は、趙翼が指摘するところの同時代人による「迴護」の<sup>④</sup>と、つまりありのままに書くことを迴避して、書く対象の不都合な行事を擁護した例ではないかと考えられるのである。ただしまったく会昌重修本は見えていなかったと断定する材料はないので、李吉甫伝の当該記事は路随の旧本の「迴護」の跡か、あるいはまた大中時の刊正を疑ってみる必要があるであろうという私の考えを示すにとどめたい。

## 五

正史といえども兩唐書のばあい、二次的、三次的史料にもとづくものであったことは云うまでもないことであろう。実録自体についても日曆、起居注、時政記といったものからの編纂物であり、国史はまたこの実録にもとづいて作られるのであるから三次的史料といえる。

これら各段階において修撰にたずさわった各史官の史観によって資料や記事の取捨撰択が行なわれたであろうから、たとえ公正を期しても主観的解釈がはいりこむ余地はあるであろう。本質的に史観が主観にもとづくことを避けられないものである以上、これが一方に偏したものであったり、編纂をくり返えた段階で多くの修撰者の手を経た史料が使われているばあいには、とくに実録の修撰や改修がくりかえされ、それがきわめて政治的な意図に左右されているという事実がある以上、正史とはいえうかつに信ずることは危険である。『旧唐書』のばあいについてみると、一書としてまとめられてはいるものの、その史料的价值に重心をおくなら、いろいろな要素が複雑に混入しているので厄介である。岡崎文夫氏は『旧唐書』の紀伝について長慶以前の記事は信用できないといっておられるのは、趙翼が指摘しているいわゆる「迴護」があり、同時代人の批評はあてにならないということの意味しておられると思う。<sup>⑤</sup>その一例は李吉甫伝の記事を検討することによって判明した。ここでは吉甫伝の記事の真偽について、元和三年の制科事件だけをとりあげたが、彼の伝には他にも問題にすべき個所があり、『新唐書』が『旧唐書』より事柄を増した個所についてもまた検討を要するのである。一人の伝の記事の真偽という面にかぎってみても複雑な背景があり、ある事柄が他の多くの伝と関連するばあいにはその乱れの幅は大きくなる。『旧唐書』は材料を豊富にとり入れている点からその史料性においてよりすぐれているという一般化した見方は訂正されねばならないし、『新唐書』についても、各伝の記事のくいちがいを正さずに踏襲しているなどの問題がある。ただ正史だ

けに依拠するならば、他の紀伝に照して事実関係が無理なく再構成できるばあいに妥当な判断をくだす以外に方法はないということになる。

この小論は李吉甫伝の一部の記事の真偽について検討を加え、その検討を通じて両唐書が内包する問題の一端を考察したにすぎないから、これをもって全体をおおうつもりはない。しかし少なくとも史料として引用するときには注意を要すると思われるのである。

## 〔註〕

- ① 内藤湖南『支那史学史』(『内藤湖南全集』第十一卷所収、一九六九年)、岡崎文夫『新唐書について』(『史林』二二一、一九三六年)参照。
- ② 稲葉一郎『順宗実録について』(『立命館文学』第〇〇〇号、一九〇〇年)参照。
- ③ 『通鑑』卷二二七、元和三年夏四月の条参照。
- ④ 陳寅恪『唐代政治史述論稿』中篇——政治革命及党派分野——(一九〇〇年)。
- ⑤ 『通鑑』卷二二七、元和元年正月の条、参照。
- ⑥ この説は『李相国論事集』より出ているもので検討を要する。
- ⑦ 岑仲勉『隋唐史』下、第四十五節の三「吉甫何以受謗」を参照。
- ⑧ 礪波護『中世貴族制の崩壊と辟召制——牛李の党争を手がかりに——』(『東洋史研究』二一—三、一九六二年)。礪波氏はここで牛僧孺らの時政批判の対象は宦官ばかりでなく、藩鎮に対する主戦論へも批判が向けられていたとして、白居易の疏文(『論制科人状』)と李翱撰楊於陵の墓誌銘などを引用して、主戦論への批判があったことを証しておられる。筆者もまた同感である。
- ⑨ 『旧唐書』卷一四八、李吉甫伝の原文は左のとおりである。(元和)三年秋、裴均為僕射、判度支、交結權倖、欲求宰相、先是、制策試直言極諫科、其中譏刺時政、忤犯權倖者、因此均党揚言皆執政教指、冀以揺動吉甫、頼諫官李約、独孤郁、李正辞、蕭俛密疏陳奏、帝意乃解。
- ⑩ 『新唐書』卷一四六、裴均以尚書右僕射判度支、結党傾執政、曾皇甫湜等对策、指摘權彊、用事者皆怒、帝亦不悅、均党因宣言、殆執政使然、右拾遺独孤郁、李正辞等陳述本末、帝乃解。
- ⑪ 『旧唐書』卷一七六、李宗閔伝、宗閔、貞元二十一年進士擢第、元和四年、復登制舉賢良方正科。初、宗閔与牛僧孺同年登進士第、又与僧孺同年登制科、応制之歳、李吉甫為宰相当国、宗閔、僧孺对策、指切時政之失、言甚鯁直、無所迴避。考策官楊於陵、韋貫之、李益等又第其策為中等、又為不中第者注解牛李策語、同為唱誹、又言翰林學士王涯甥皇甫湜中選、考覈之際、不先上言、裴均時為學士、居中覆視、無所異同。吉甫泣訴於上前、憲宗不獲已、罷王涯裴均學士。(略)
- ⑫ 『新唐書』卷一七四、李宗閔伝、學賢良方正、与牛僧孺詆切時政、触宰相、李吉甫惡之、補洛陽尉。
- ⑬ 『旧唐書』卷一六九、王涯伝、元和三年、為宰相李吉甫所怒、罷學士、守都官員外郎、再貶虢州司馬。
- ⑭ 『新唐書』卷一七九では左のようになっている。
- ⑮ 元和初、會其甥皇甫湜以賢良方正对策異等、忤宰相、涯坐不避嫌、罷學士、再貶虢州司馬、徙為袁州刺史。
- ⑯ 『旧唐書』卷一四八、裴均伝、(元和)三年、詔學賢良、時有皇甫湜对策、其言激切、牛僧孺、李宗閔亦苦詆時政、考官楊於陵、韋貫之升三子之策皆上第、均居中覆視、無所同異、及為貴倖泣訴、請罪於上、憲宗不得已、出於陵、貫之官、罷均翰林學士、除戸部侍郎。
- ⑰ 『唐會要』卷七六、制科舉の条ではつぎのとおりである。

元和三年四月、以起居舍人・翰林學士王涯為都官員外、吏部員外郎韋貫之為果州刺史、先是、策賢良、詔楊於陵、鄭敬、李益、与貫之同為考官、是年牛僧孺、皇甫湜、李宗閔条对甚直、無所畏避、考官考三策、皆在

第、權倖或惡其詆己、而不中第者、乃註解其策、同為唱誨、又言涯居翰林、其甥皇甫湜中選、考覈之際、不先上言、故同坐焉、(略) 裴迥時為翰林學士、居中覆視、無所同異、乃為貴倖泣訴情罪于上、上不得已、罷迥學士、除戶部侍郎。

①⑥ 『白氏長慶集』卷第五八、「論制科人狀」、右臣伏見内外官、近日除改、人心甚驚、遠近之情、不無憂懼。喧喧道路、異口同音、皆云制舉人牛僧孺等三人、以直言時事、恩獎登科、被落第人、怨謗加誣、惑亂中外、謂為誑妄、斥而逐之、故並出為閩外官、楊於陵以考策敢取直言者、故出為廣府節度、韋貫之同所坐、故出為果州刺史、裴迥以覆策、又不退直言者、故免內職除戶部侍郎、王涯同所坐、出為虢州司馬、盧坦以數舉事、為人所惡、因其彈奏小誤、得以為名、故黜為左庶子、王播同之、亦停知雜事、臣伏以裴迥王涯盧坦韋貫之等皆公忠正直、内外咸知、所宜授以要權致之近地、故比來衆情私相謂曰、此數人者皆人望也、若數人進則必君子之道長、若數人退則必小人之道行、欲卜時事之否臧、在數人之進退也……今忽一旦悉疎棄之、或降於散班、或斥於遠郡、設令有過、猶可優容、況且無瑕、豈宜黜退、所以前月以來、上自朝廷、下至衢路、衆心洶洶、驚懼不安、……凡此除改、佞者紛然皆云、裴迥等不能委曲順時、或以正直忤物、為人所媒孽、本非聖意罪之、不審陛下得聞之否……

①⑦ 『旧唐書』卷一七一、張仲方伝、受授無守、而曰慎才以補、斥諫諍之士于外、豈不近之蔽聰乎。

①⑧ 『資治通鑑考異』卷一九、元和三生九月「李吉甫為淮南節度使」の条参照。

①⑨ 岑仲勉、前掲書。

②⑦ 陳寅恪、前掲書。

②⑧ 『四庫全書提要分纂臺』旧唐書提要の条参照。

②⑨ 『旧唐書』卷十七下、文宗紀、同書卷一五九、韋處厚、路隨伝、『冊府元龜』卷五五六、国史部等参照。

②⑩ 『旧唐書』卷一四九、沈佺期伝には、「佺期在史館、預修憲宗實錄未成、廉察湖南、特詔齊一分史稿、成於理所」とある。

李吉甫伝に関する一考察

②④ 『旧唐書』卷一八、武宗紀、

(會昌元年) 四月辛丑、敕、憲宗實錄旧本未備、宜令史官重修進内。其旧本不得注破、候新撰成同進。時李德裕先請不遷憲宗廟、為議者沮之、復恐或書其父不善之事。故復請改撰實錄、朝野非之。

②⑤ 『旧唐書』卷一八、下、宣宗紀、

(大中二年十一月) 敕、路隨等所修憲宗實錄旧本、却仰施行。其會昌新修者、仰並進納。如有鈔錄得、敕到並納史館、不得輒留、委州府嚴加搜捕。

②⑥ 吳縝『新唐書糾謬』卷第一、「李吉甫謀討劉闢」の条および趙翼『二十二史劄記』卷一七、「新書增旧書処」中の李吉甫伝の条。

②⑦ 同右書。原文は左のとおりである。

按武宗時、吉甫子德裕重修憲宗實錄、虛張其父之美。宣宗時、特命刊正。今此等事、旧書皆無而新書增之。豈旧書擬大中刊正之本而新書尚擬會昌重修本耶。

②⑧ 趙翼によれば、大中時に刊正がほどこされた時点で、新たに大中刊正本とでもいえるものが作成され、『憲宗實錄』には、路隨本、會昌重修本、大中刊正本と都合三本が存在したかのように解釈しているが、大中二年の敕文や周墀伝にてらして考えてみると、新たに「大中刊正本」が作成されたとは解釈できない。周墀伝では「遂に新書を削る」とあって、回収した會昌重修本をまったく破棄したか、あるいは問題のある個所の版を削ったかいずれかの処置をとったと解される。

②⑨ 内藤、前掲書。

③① 『崇文總目』卷一一。

③② 『二十二史劄記』卷一六「旧唐書前半全用實錄国史旧本」の条参照。岡崎、前掲論文。

